

光 明 寺 通 信

# こ う み ょ う

第 5 号

この如来は光明なり。光明は智慧なり。

智慧はひかりのかたちなり。

親鸞聖人著作『一念多念文意』

今年の夏は雨が多く、じめっとした日が多かったように思います。私は夏が好きなので、何だか残念でした。もっとじりじり暑い夏を過ごしたかった・・・と思うのは私だけでしょうか。さて、前住職の後を継ぎ、私が光明寺をお預かりするようになり二年が経過いたしました。が、なかなか難しいなあと思うことの一つに「法名」ということがあります。

多くの方は、亡くなった時に付けられる名前を「戒名」とおっしゃいます。しかし「戒名」とは、亡くなった方のいのちと生きてこられた人生にランクを付けるものであり、浄土真宗では用いけません。浄土真宗では、みな等しく仏弟子としての名告り（なのり）である「法名」をいただく、と言うのです。

そしてその名は、私たちが生きていく「よりどころ」を明らかにする名でありますので、本来は生きているうちに、自らが真宗門徒の生活を選び取ることにより、いただく名なのです。

しかし現実には、生前に名告ることが叶わず、亡くなった時に、仏弟子としてのいのちを敬い、これからの私たちにとっての大切な仏さまとして、「法名」をお付けしているのです。

「法名」をいただくには、「帰敬式」を受式していただくこととなりますが、今回の「こ う み ょ う」にてご説明いたします。



京都・秋の渉成園(枳殻邸)

第5号

2017年10月1日発行

発行責任者

〒135-0013

東京都江東区千田9-7

真宗大谷派 光明寺

住職 小林尚樹

電話：03-3644-3043

メールアドレス：

koumyouji@sky.plala.or.jp

## 真宗門徒として生きる

・ 帰敬式（おかみそり）を受ける ・

まずは、本山より発行されている「**帰敬式**」案内のチラシに記載されている「**帰敬式**と法名」という文章をご紹介します。

いま、この人生への問いを出発点として、南無阿弥陀仏の教えに、人間としての生き方、あり方を問い学んでいこうという出発の式が「**帰敬式**」です。「**帰敬式**」を受式しますと、「**釋**」の字を冠した二字の法名をたまわります。それは、空しくない人生を生きてほしいと願っておられるはたらきに出遇うことを、この私の人生の上にあきらかにしていく名告りです。

ともすると、法名は「亡くなってからいだければよい」と思われているかもしれませんが、しかし「**帰敬式**」は、お釈迦さまの弟子、仏弟子になることであり、それは、南無阿弥陀仏の教えにみちびかれてわが人生を生きるということなのです。したがって、生きている「**今**」受式することがその本来的な意味なのです。

真宗の伝統のなかにこの身を受けた一人ひとりの、人生の新たなスタートとして、「**帰敬式**」をつけとめていきたいものです。

### ①「**帰敬式**」（おかみそり）とは

上の文章から、「**帰敬式**」とは、お釈迦さまの弟子、つまり仏弟子となり、人生を新たに出發する儀式だということが分かります。そして、南無阿弥陀仏の教えに、人間としての生き方、あり方を学んでいこうということとを自ら選び取る儀式でもあります。

そのため、煩惱の象徴である髪を剃るという形態をとることで（実際には剃りません）、南無阿弥陀仏をよりどころにして生きていくことを誓うのです。

それを「おかみそり」と言います。



### ②「**法名**」をいただくということ

多くの方は「**法名**」は、亡くなった時に、住職につけてもらう名前だと思われるようですが、確かに、**命終**に間に合わずに、葬儀の際に法名をお付けする、そういう場合もあります。本来は、生きている今、いただくことに意味があるのです。

私たちは皆、生きていることを願われた名前を持っています。その名前で生きてきましたが、様々な価値観の中で、思うようにならずに、自他共に、お互いを傷つけながら生きてきたのではないのでしょうか。

安心できる生活を送りたい、幸せな人生を送りたい、と思うのは、当たり前のことです。それならば、今のままで幸せな人生と言えるでしょうか？ 言える方は、素晴らしいと思います。でも、もし言えないのであれば、どうして言えないのか、そのことを南無阿弥陀仏の教えに尋ねていこうという歩みを始めることが、「**法名**」をいただくということなのです。

### ③「**真宗門徒**」とは

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人が明らかにされた南無阿弥陀仏の教えを、生きていく「**よりどころ**」とする人のことを言います。広くは、浄土真宗の教えに基づいた仏事や作法を、生活の習慣として生きている人のことを言います。果たして私は、真宗門徒なのでしょうか？ ゆっくりと、一緒に考えてまいりたいと思います。

### ④「**戒名**」とは言いません

浄土真宗では、いかなる場合においても「**戒名**」という言葉は使いません。理由は…、次のページをご覧ください！

## 仏事について……ごが知りたい!

### 法名と戒名

「戒名<sup>かいみょう</sup>」とは、本来は師より戒律<sup>かいりつ</sup>を受けたものに与えられる名前でしたが、今では、浄土真宗以外で、僧侶が死者に対して授ける名前にもなっています。江戸時代以降の檀家制度の中で、お寺の運営に利用されるようになり、「戒名」が長い方が死後により世界に行くとか、使われる文字によって格が違うような言い方をして、たくさんのお布施を頂戴してきたのではないかと、僕は思っています。それは、亡くなりたいのちをお金によって差別してしまうことになります。

このようなことは、霊信仰<sup>れいしんこう</sup>と言って、亡くなった方を靈魂<sup>れいこん</sup>にしていく考え方になります。その霊を成仏<sup>じやうぶつ</sup>させる力が僧侶にあるとして、その力にすぎないように教えてきたのです。

しかし、そもそも、仏教は霊信仰を否定してきたはずなのです。亡くなった方は、すでに仏さまであり、決して迷ってはいません。迷っているのは、むしろ私たちの方で、



その迷っている私たちの姿を、仏さまである、今は亡き方々より教えられるのです。それが、仏事をつとめるということです。

そのようなことから、浄土真宗では「戒名」とは言わず、「法名」といってききました。「法名」とは、本来は、仏の教えによって生きるものとなるという、仏弟子としての名告りなのです。それは、私たち一人一人の人生における態度決定とも言えますので、生きていくうちにいただくことに意味があります。

「法名」は、男性は「釋<sup>しやく</sup>〇〇」、女性の場合は「釋<sup>しやく</sup>尼<sup>に</sup>〇〇」となります。これで十分なのですが、「釋」のまえに「〇〇院」という院号<sup>いんごう</sup>が付いていることがあります。院号は、もともとは、本山へ懇志金<sup>こんしきん</sup>を納めたことへのお礼として、本山よりいただいたものでしたので、今では、院号をご希望される場合には、本山への懇志金をいただいております。

また、居士・大姉<sup>だいし</sup>・信士<sup>しんし</sup>・信女<sup>しんにょ</sup>という位号<sup>いごう</sup>は、在家の信者として付けられた敬称のようなものですので、法名には入りません。時勢によるものと思われるので、今はお付けしていません。

「法名」は仏弟子の名告りであり、亡くなったからは仏さまの名前です。「戒名」は、亡くなりたいのちを靈魂にし、差別してしまう名前だと、僕は思っています。

### 浄土真宗の仏事作法では

#### 法名軸をお勧めしています

お身内を亡くされ、葬儀の際に、法名が無い場合には法名をお付けします。葬儀の際には、仮に法名紙に法名を書いて、お勤めいたしますが、その後に法名軸をご用意いただくことが、本来の仏事作法になります。



最近お亡くなりの方はお内仏の右側面に、歴代は左に掛けます。

しかし現状は、お位牌を作られる方が多いと思われます。または繰り出しのお位牌です。最近、過去帖も増えてきました。お位牌は、どうしても霊信仰につながってしまいますので、亡くなった方を浄土の仏さまと受け止める浄土真宗の仏事作法とは合うものではないのです。

少しずつで結構です。浄土真宗の仏事作法に適うよう、見直していきましょう。

## 報恩講のご案内

宗祖親鸞聖人の御遺徳を偲び、阿弥陀如来の本願に出遇い得た喜びを、共に確かめ合いたいと思います。ぜひ御参詣ください。

期日 2017年11月12日(日)

日程 午後1時 勤行

午後1時半 ご法話 黒田昭雄師

(港区勸勝寺住職)

午後2時半 お齋

## 修正会のご案内

新しい年を迎えて、ご一緒に「正信偈」をお勤めしましょう。

ささやかではありますが、お節料理、お雑煮やお汁粉をご用意しております。

日時 2018年1月1日(月) 午前11時

※お寺にご連絡ください。

## ご報告

毎年8月、東京教務所を通じて、宗派への護持金等の納金依頼書が届きます。それぞれのお寺で提出している門徒戸数に基づいて、ご依頼額が決められます。今年度の光明寺への依頼総額は、82万4500円でした。

今年も無事に納金を済ますことができました。みなさまに御礼申し上げます。

## 光明寺ホームページより

今回も前回同様に、ホームページに掲載している「掲示板のことば」をご紹介します。ホームページはスマートフォン(画面の大きな携帯電話)でもご覧になれますので、左にQRコードを表示いたします。アプリケーションソフトが必要になりますが、簡単ですので、ぜひご覧ください。



検索される場合は、「江東区 光明寺」で探すことができます。お試しください。

また、お寺の玄関に設置している掲示板の横には、掲示板のことばと住職の感想を、お持ち帰りできるように印刷して置いてあります。お立ち寄りの際には、ぜひご覧ください。

《掲示板のことば(五月掲示より)》

死に向かつて

進んでいるのではない

今をもらって

生きていくのだ

印刷している住職の感想です。

人間として生まれてのちは、必ず死を迎えます。いまだかつて、死ななかつたのちはありませんので、見方によっては、生まれてのちは死に向かつている、と言えるかもしれません。

一方で、今を生きている、という言い方もされます。こちらの方が私たちには現実的に感じられるかもしれませんね。

死に向かつて生きていると考えることは、人生を引き算しているのです。おそらく寿命は80年くらいだから、今は50歳、あと30年かな…と。そんなことは、分かりませんし、なんだか元気が出ませんね。

今を生きる、と考えることは、人生を足し算しているのでしょうか。「今」という時をもらって生きている。でも、もらったらその「今」はすぐに過去になってしまいますから、また「今」をもらう。そうして、いつも「今」という時を生きているのではないのでしょうか。それは、すぐ前の「未来」を「今」としてもらっているのですね。だから、死に向かつて生きていると考えるのではなく、常に、純粹な「未来」を「今」としていただいて生きている、そう考えてみたいと思うのです。